通信第七十号　すでに救いの中にり

　今年も残すところ一カ月となりました。如来さまの船に乗せられて嵐の中を如来さまにられてあっという間に来たと、同時に五年、十年が過ぎた感じもするのです。なぜなら生長させられたからです。この一年間に通信のほかに、五冊の冊子が出版され、ユーチューブや月四回のリモート法座、外へ出かけるご縁などよくもこれだけの事ができたと驚いています。これも同朋の皆様のご尽力あっての事、背後に如来さまのご本願力のお陰であります。

　先日、久々にゆっくりした時間が与えられたので法喜と朝の散歩に近所の公園へ出かけました。湖面に紅葉がきれいに映っています。一句浮かびました。

光受け　える　かな

さて、この頃気になるニュースがあります。若者のあいだでせき止めなどの薬を過剰に摂取して「オーバードーズ」という興奮状態になることが流行っているとのことです。現実逃避とか、経済的苦しみから一時的に逃れるため、死にたくないからしているとか。色々あるようです。解説者などは現代の多くの人が未来に希望が持てず、結婚に対しても消極的となり、子育ても困難である。「生まれなければよかった」という声が上がっているとのことです。政治や教育などあらゆる分野でそのことが問われているのに明るい方向が見えて来ないという意見がありました。

　また、あと二年後には日本だけで七百万人の認知症状の人が出るとの予測がでています。世界で起こっている紛争や戦争、自然災害、暗くなるニュースが毎日飛び交っています。老いも若きも何ともやりきれない環境の中で逃げることも出来ずにをされている人が多いのではないでしょうか。

　高度経済成長のなか田舎から都会へ就職された人たちの心のよりどころとして新興宗教が流行りました。ほとんどの教えは先祖供養や右肩上がりの希望を与えられるような教義です。それも経済成長が弱まり、教義も形式化したり政治に近づいたりして魅力を失いつつあります。また、法外なお金を搾取する教団も問題となっています。相談できる良き先生や友達もいないために引きこもりやうつ病、さらには自殺者も増えています。こうした中で頭が下がっていく他力の教えは生活の中でいかなる救いをもたらすのか。強く願われ、問われています。

この前、ある少年との嬉しい出遇いがありました。「形の無い本当の光は暗い影の形のところにこそ生きて現れている。だからいつもつきまとっていたことを知らされ驚きました」私と一時間の会話をした後の感想文です。一カ月前、彼とのやり取りの中でさっと顔が明るくなったのが印象的でした。感想文を読ませて頂き目頭が熱くなりました。改めての他力（仏から照らされた私の姿）の歌のお心が味わえて来ました。

松の　暗きは月の　光かな

私自身が本願に帰依するまで、自分から自分を見ては裁き、苦しみました。ですから親鸞さまの「悲しきかな、」という悲しい中にも明るい世界があることは長い間、知識として知っていても味わえませんでした。の裏に報謝あり、報謝の裏に懺悔あり。暗い影は如来の光明のお照らしのお陰であります。悪人の救いであります。全く逆の受け止め方をしていたのですから苦しかったのです。

　私が高校生の頃でしょうか。父が泥酔の中で「不連続の連続」という言葉を発しました。妙にそのお言葉は心に残りました。父が勉強する姿を見たことはありませんでしたが「樹心の会」というグループの仲間に入れて頂き酒を飲むことを楽しみにしていました。先生のご法話を聞いていました。父の宿業を照らしたお言葉だったのでしょうか。

　娑婆と浄土はこちらからは不連続です。しかし、浄土から見たらつながっています。浄土からのおはたらきのご廻向のゆえに連続です。如から来生です。「不連続の連続」です。今、あの声は如来さまが父の口を借りて私への呼びかけであったのかと知らされます。六道輪廻の三界（欲界、色界、無色界）を超えた世界に太陽が昇る。すなわち本願に帰依されるとおのずと生命が明るく元気になり、風景がひろがり、それまで見えなかった世界が見えて来ます。

「南無とは帰命、すなわち発願廻向のこころなり、阿弥陀仏というはその行なり」蓮如上人のお文さまには何度も出て来るお言葉です。「阿弥陀仏というはその行なり」どんな行なのか。疑問を持ち続けていましたが明らかになって来ました。自分ばかりをたのんで如来の本願を疑い信ぜず、たのまず反抗していたのです。自分には真実はなく、汚れ、清浄の心は無いのです。如来は、も清浄であり、真実であり続けて私に付きまとって下さっていたのです。しかし、自分にも多少でも良いところがあると自己肯定してその自分を認めてもらおうとしているときは如来様をなきものにしているのです。この事に気づかされるのは大変なことです。「薄紙一枚がはっきりしない」と本物の同行さんが苦しまれた壁です。私においては大石先生がビニールを通してしか見えない。見えるのだけれども見えない。と二十四年間かかりました。自我の頭が下がるまで、すなわち帰命するまで如来さまがご修行し続けて下さっていたのです。二十年三十年どころではありません。

五十六億七千万

　　　弥勒菩薩はとしをへん

　　　の信心うる人は

　　このたびさとりをひらくべし

これから五十六億七千万年先ではありません。すでに過ぎて来たのです。阿弥陀如来に帰依するために阿弥陀如来がご修行、ご思案して下さり続けて来たのです。私どもはすぐにめますが如来は片時も諦めず、見放さずに私の煩悩に付き添い給うて、影の如くに寄り添い給うて来られたのです。私がいくら反抗しようと、逃げようと、ごまかそうと忘れようと

　如来大悲の恩徳は

　　身を粉にしても報ずべし

　　師主知識の恩徳も

　　骨をくだきても謝すべし

身を粉にしても、骨を砕いても私が如来に帰依するまでご修行してこられ、今もこれからもおはたらきづめであります。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

私が帰依するまで如来さまが先に私の宿業、煩悩に帰依して下さっていたのです。如来さまの利他行、還相回向（さとりの世界から、迷いの衆生を救うために下がってくださる）です。如来さまが私と一体と成り、心に口に南無阿弥陀仏と現れて下さっていたのです。

しかし、そのお心は帰依されるまでわかりません。曽我量深先生が

　如来、我と成りて我を救い給う

　されど我は如来に非ず

炭に火が点かないと、明るくなったり、温かくなったりしません。火が点いた時は炭と火は一体です。しかし、炭は火ではありません。炭を離れて火はありません。炭は火が点くためにあったのです。磁石と釘のおえや接ぎ木のお譬えも同じです。・（凡夫）。。宿業と本願。私を離れて如来無し、如来さま離れて私無し。親子同時誕生です。二にして一。一にして二の世界です。そこから不思議に人の幸せを願う心が動き出します。そんなことは微塵もない私の心に動き出すのです。

仏教は苦悩する人に何を与えているのか。清沢先生は「内観（止観）」であるといわれたそうです。心理分析やカウセリングと似ているようで違います。人間が人間を分析しても明るくはなりません。私がそうでした。

「浄土論註」には（内観）の事を静かなと清浄なる浄土を観察する心として説かれています。大石先生は味わいとか響きを大事にされました。仏法の味わいを「浄土論註」では

仏の国土をてその清浄さにふれる

　一切の衆生を大乗（どんな人も救われる）に入れて一筋に生かしめる味楽

　衆生にいつまでも功徳（仏の功徳）をたもたせ仏道から退転するようなしい行為をさせぬ味楽

　衆生の種類に応じて救済し、仏を供養し、自ら願ってあらゆる世界を仏の国土とする味楽

他力廻向の信心の世界から幸福感や充実感が自然に沸いてきます。平凡な生活の中や人間関係の中に浄土の味わいが出て来るのです。仏法の世界を知らず、食わず嫌いでいたことに気づかされた人は幸いです。もっと早く知ればよかったと何度も言われていた教育長さんがご門徒におられました。現代の暗記力、理解力が中心で心の世界がお留守にして来たつけがあらゆるところに出てきております。でも、簡単に文部行政は変えられないそうです。

私は生活の中で内観のお陰で大いに助けられています。例えば、自分と意見の違う人の話を聞いている時、以前の私だったら黙していても腹の中では相手の話の内容を批判、否定してばかりしていました。そこには余裕がなく相手の立場や業は見えていません。腹の中で鉄砲を撃ちまくっていたのです。打ち方めとの号令（南無阿弥陀仏）でこちらからの世界が止まったら、向こうからの世界がはじまります。目の前に花が咲いていた。鳥が鳴いていた。青空が広がっていた。支えて下さる方々がおる。

「なんだ、こんなに恵まれて素晴らしい中にいたのか。如来さまを知らなかった。すでに宝の山の中に在った」。これはアジャセ王のに通じています。

　　アジャセ王は世尊に申し上げた。世尊よ、私は世間を見渡しますに、という毒の樹から

　　伊蘭の樹が生えます。伊蘭の実からの樹（かぐわしい香りの樹）の生えたことを見たことはありません。しかるに今、私は初めて伊蘭の実から栴檀の樹の生じたのを見ました。伊蘭の実というのは、私のことであります。栴檀の樹というのは、私の心に生れた私に根のない如来の他力の信心のことであります。

　　　根のないというのは、私は今まで、しく、謹んで如来にえつったこともなく、法宝僧宝を信じたこともない者でありますが、こういう者へ、この信心の生じて下されたのは、如来の廻向のお陰であります。世尊、もし私にして、如来世尊にお遇いすることができなかったらば、わたしは無量永劫の間、地獄へ落ちて限りのない大苦悩を受けなければならぬのでありました。私は現に仏を拝したてまつっていますが、願わくば、この見仏のあらゆる功徳をもって、未来の衆生の救われることを願います。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　教行信証の信巻　聖典２６５頁

大石先生が接ぎ木のおえをされたことがあります。私は嬉しくてお説教でそのことをお話し

ました。しかし、その時は受け売りでした。身の事実とは成っていませんでした。

今ようやく芽が出て樹や枝が生長を初めています。ご本願が私の宿業を使って下さり宿業が明

るくなりました。寺生まれでよかった。あの両親がいてくればこそ、子供たちのお陰です。

一切のお陰であります。ご恩の中の生活です。

元気で一刻も早いうちに気づいてほしいのが親（如来）さまの願いなのです。しかし、何か理由もなく反抗してしまいます。自分でも気づかない自我がはたらいているのです。深い聞法がないとそのことに気づけません。

親を求めて親に遇えず、生まれ故郷に帰りたくて帰れず。安心できずさ迷い続けて来た私がよき師に出遇い、よきに出遇い。真実の親様、如来に出遇うことが出来たのです。これほど幸福なこと、安心なことはありません。

大無量寿経の下巻の終わりころに、すでにみな浄土の中にありながら、偽の浄土の在り方、仮の浄土あり方、真実の浄土あり方の問題がでています。仏智を疑惑しているからだとあります。大石先生が「の扉はあいている。出なさい」と仰せられました。「そういわれてもどう出ていいのか。寺から出ることなのか。先生は自由だけど私はそうならない。無理なことをよく仰せられるな」と疑問と反抗心がよぎりました。自分の思いで作ったがあると思っていただけで、本来籠などなかったのです。自由な天地がすでに開かれていたのでした。

親鸞さまは広大なる十八願の天地の世界が開かれたところから、すでにその道を歩かれていた先陣として七高僧さま方と出遇われ、さらに世尊、さらに弥陀の本願とさかのぼられて行かれたのではないでしょうか。大石先生が「本願は一番古くて、一番新しい」と仰せられたことはこのことだったのかと今、味わわされます。ご本願のおはたらきは常に新しいのです。宿業煩悩も常に新しいのです。

令和五年（２０２３）年十二月初旬　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　常照　拝

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　常照　拝